松のわらひ

乾

中村俊定文庫
文庫 18
453

宗像田中図書

奥羽紀行序

[illegible]

[illegible]

[illegible]

遠[illegible]

[illegible]

[illegible]

中村侯定文庫

千代倉氏の風雅代々をこの道に
世に人寂無軒知足子芭蕉翁を師
として志深くさらしくさらし
孝子蝶翁子　儒子代乃を嘗し
今又蝶翁子の風流信仰を立て
俗なる世を捨てむとしむるの民
あれてしかもをこがましくあ

我友武蔵時菴風斧子多年のおもを
慕んと所沢の草庵に拂ふ杖ハ
所連乃寺門より白河に関まで
能因の住居をとゝ免てもらいの
ちうつるぬ人道ゝ人ゝも
友ゆ利て笠をぬき杖をとゝて
同さむるん地をゝゝやゆ爲ハ

松のそ好士おあるに謝侯より用紙
筆一造を受それらへ所の仙府の
知る孫人さろよそなるれてあ
地郷のおひしあるさうし
松浦氏八の系より八二系家北法郷
やうん唐うを建長禅寺の盡岩
和尚と勅命行前大寺乃集め盡老

給ひしも給うとや行そうこと
いそれある隅を吟行さうこと
さ侍郷士とそに探題家仙の文も
きのそしきうふうん翁深の
ものかうるる合歓を答をうへ
面ふくむ姿もさし附よそそもし
既江府より巡一日紀を元う記て

好風地を掃るとあり[illegible]
いさゝか掃きてよしいとゝのとの
事なとあやまなくうゝ永あ[illegible]
松竹笑合歓の新とよやまとう
屋紀といふ此を明和六丑年九月の
[illegible]

東武根岸隠士　蓼太

奥羽行脚句

成時菴嵐亭
千代倉蝶羅

東都別　明和六己丑四月廿日

来て見れと内そ春の暮拾ふ船　蝶羅

鳴海なる旅宿蝶羅の松島へ
首途を祭り[illegible]

文字摺ゝとの松も嵐の藤ゆゝ　文尺

春雨よそゝ降りしときのふハきのふ
今日はまちぬいつきて来ぬ
ひゝ名残の月と中きゝ

夏引の糸や服ん〳〵ゝ　六窓

蝶羅紗丈のみちけく（敷くを）
文字きり小よう〳〵て　帰き夜ちゝも　山幸

夏衣名の酒肆ゝゝ千住（宗祇の
おゝゝ逢ゝて面あをゝ
よゝつれや傷ても夜の旅こゝを　蝶羅

軒面ゝ笠脱ぎ川の旅路哉　嵐亭

草加とゝふ宿ゝて
泊きゝて敷しきゝ　蝶羅

板ゝの宿ゝ屋ゝゝ
尺布もなくゝて　ゝ板の花　仝

名ゝ知ゝ板ゝの屋ゝ
栗橋のゝゝ　嵐亭

寿
きゝ〻きく　坂東太郎かゝきゝて　蝶羅

古河の城中之亘等をかたる
はかとう枕香の古河のうらと
きうえ作りて　蝶翁

みしの宿や枕香なりも一夏すゝ　嵐亭

枕香うれをかれやかり一夏浦

宝八法奉納

神さびて麦の穂波や八方面うる　仝

森〳〵と四方の梁もけふ新玉哉　蝶翁

卯月七日麻布氣千亭上やうて

立うきて麻はたちてまのをゝき　仝

翌日夏天遠留宿仙

出て海をかきうけ照や月と星　穎子

ゆ〳〵くゝ絡も水の一礼　嵐亭

唐墨乃おかひう簾中ひけく　蝶翁

さをう面さうく筆木巻るし　芝廷

重出影もなかさへまりう拍　嵐

秋来にたうと馬北方ふるひ　城

淀川のおんふ形又はつれ屋　芝
出会てんまんふ山もの　嵐
夏ふ瑠璃光寺さく　燥
一同ふえうる蛟屋の作り初　芝
鞍をゝ洞ふ乃狩ふ月　面　嵐
竹生島へハ遥作乃使去　燥
枯芦又板の世ちぬ流し　鶏　芝
五春明さむく　清ふ杉明　嵐

白丁ハ建製作ふつきゝふ　燥
仮屋皇居へうれうかいけ　芝
花笠をふ作乃ふれ人乃　嵐
寧拓屋の完乃ぽちゝと　燥
秋立屋ふ乃ちかちと約ふ小　芝
据傾城の仮名の作ふ　嵐
跡ハを旅ハ志ふ乃ちゝ　燥
宮ちりと疲ふちゝハ連綫　芝

幽庵を軍功志ゝ　功志　嵐
堺乃屋を注をとり乃母　燥
投細のゑあゝ乃翠み茶乃ら〳〵　芝
ちゑ〳〵とをゝく童息　嵐
具足ゝゝ大判史紀七月引　燥
行所を掘ても近い水筋　仝
新蕎を月常泊のとゝ〳〵史紀　芝
おくれ撲も上仏議申　嵐

十ウ

幕もをてゝゝ〳〵鶏乃華　燥
思木城中けゝ庶乃も面　芝
面度ふけきゝゝふとなゝ新〳〵　嵐
ゝ〳〵いをの日を祝茶海　芝
二つゝ三つ咲きハとける花乃宿　燥
住をもゝゝきのゝいく〳〵い中　執筆
日光山近きゝふゝゝ家の株芝丸或ハ
石ふとみて寝ひゝるを見て
ゝゝさ中国も古義を花活堂　燥延

大岩氏文車亭にて

戴ワラ紫吹さへあるぬ面の花　　蝶羽

嵐蝶の二師面白はなを旅立給ふを
見おくり作りて

おとゝきすしゝふも聲ふ杖のあと　　麻江　文車

立よ法師と義弘面れ日　　蝶羽

笠乃風こすもれぬ旅路して　　嵐亭

卯月十日晴天　日光山奉納

作く面〻扇を幣こ日の光り　　仝

夏山や梢芝ゐれ下し作く　　蝶羽

寂光寺　形くよ滝あり

白滝や水鈴の作く打の音　　嵐亭

志〻〻や滝へ赤色打出る　　蝶羽

大日堂

池乃面ゆ友花の影八蓮もなし　　仝

かんきんゝ閑

ゆうくゝと梵字のうけやなへ〻〻巳　　仝

中禪寺　二荒の湖と云る際の有

岩ゝ根や　登れば　法乃　苔清　水　　嵐亭

風蓮ふかゝる人　来し　二荒の湖　　蝶花

安房掬盛りなる夏

夏折ゝ　夏　花　有　四　掬　　仝

夏やアの　誓ひ　ひよそれぬ　花乃　雪　　嵐亭

けさん　滝

かハせども　仲を　ひらかゝる　滝足　小　　蝶花

裏足滝

座清　あ　ま　あ　ら　ら　や　山の　法　花　　嵐亭

滝足　ま　ま　這　切　葛　の　ら　ま　る　れ　　蝶花

作山の　秋　羅　雲　亭　ま　や　ま　て

志　を　清　市　乃　花　と　き　ま　る　や　旅　夜　　仝

笠　う　け　ふ　高　や　ま　る　秋　山　源　足　菓　　嵐亭

吟海の　葉　蝶　花　み　奥　羽　り　の　形　ら

岩　の　形　清　ひ　ー　こ　と　を　ま　ら　こ　ひ　て

秋　扇　や　待　へ　ま　夢　も　丈　夫　な　所　　作山　羅雲

那須野にて西陣者共

簾をゝや夕立さりし九月朔日　蝶羅

一日温泉に浴す

旅疲を一枕浴きて夜ふけ　仝

夏山ゝ中ゝなりし旅疲小　嵐亭

高岳仙

凉風に浴衣ゆゝしき旅疲小　嵐亭

岩ゝ石ゝ小流の走ゝ孔　蝶羅

秋上乃朝ハ白ゝ小流ゝ

上下ゝ走ゝ男てもあり　嵐

流ゝ行ぬ弓を日に世の辨　〃

世辨をいてゝ象ゝ乃　蝶

下畧

教世石

天の代や石をくくりて苔のむす　蝶羅

卯月十日胡雪ふる〳〵白川の関ふみこえて杜宇哉　岚亭

ゆ作りて

白川のかの関越てよろとてきく　岚亭

越てきけるしめてをくの新茶　蝶羅

関屋の里にやとりしに山水の好士

蕉秀といふ人茶菓子をもてなす

謝詩をうけて

浅香沼

浅香沼にて

此清水に汲とるしの原ちる　蝶羅

岚亭

松島吟行の序ふりて岚蝶の

二風ふよ訪きく

かゝる歌を二度よとけるし　時雨　蕉秀

此かとう歌て関屋の宿とゝるし

苗しろ訪もまつ関屋ふる　蝶羅

安達ヶ原黒塚

思略をおもふ塚乃ちの下ち　蝶蕉
思塚や根数の角ハ花乃附　仝
見百合ち刈力ちも詠める　嵐亭

十七日二ち松ち性ち生ち氣
安達ち命ち一声ち　ほとゝぎす　蝶蕉
麦秋ち人ちもちちち　一声
松の根ち形〳〵笠の紐解ち　嵐亭
廣恵ち恵ハ蓋ちなちち　蝶

石恵ち石乃形ち成月乃蓋　一
萩ち折笠萩ち　嵐
菊ち宿の名ち年ち秋ち風　蝶
隠ち返り見ち返り　一
遠芙ち咲ハち成降ちき　嵐
ち竜ち生ち舞ち乃　蝶
小判ち人ち恵ハちなく思れち　一
廣ち何や〳〵考へるち　嵐

附なる牛の病て有る茅の家　蝶
お撰もとり節れを近　一
差し凡乃唯霄月うつるかな　嵐
何はなしも志も為ぬ稽意　蝶
薄枕夢もみぎせぬ　花乃山　一
紙子のかるい快いもの　嵐
書院先き茅家に又新歳せて　蝶
お伴ゆうしく旅ハすなら　一

西行を偲れんをうく笑て　嵐
竜を書きうる道の宮中　蝶
瓦るを代いと伴ふ顔ひ事　一
ふは連ゑと小師ゆうう　嵐
蕭りくみられて蓬る鬼髪　蝶
大盃を さ陸も きり　一
拵上を三粒ふ数のを蛙うう　嵐
負て有るみを抱けハ又遠ふ　一

月影をこかせたきくふ水車　蝶

秋寒堂の張合もなし　嵐

楢涼ふ宗ゟ乃ろく奈良の廂　蝶

杖乃短うなるもめでたし　一

比叡さ果いどりり霜と乃こ　嵐

蟯そ毎了さのせんさく　蝶

方丈の花よめされて膝ま俾く　嵐

春乃ぬくき戯うけて伸く　一

卯月十八日志乃ふ北里遊吟

おうしのそそあしいと濃かなりけれハ

かゝん咲秋を見せ退の山近し　蝶花

戸貼きこれて安かさきさそ　蘭雅

染うれ此ちも出立を遠く小　嵐亭

燧乃炭を志めたる面晴　三指

去りし寝も旅てきふれ月　水雅

落うら先へ秋を眠りおす　楮白

ウ

詩人もなほとおもひ給の末て　蒙

年ゝのふるきと見のゆせいし　煉

見別もいあふいやれ丸市宿　三

さみゝしおゝゝぬる猿多村　鼠

蕎人を意路のそゑと丘きれ　楮

能きさやゝなり行年の役　水

又しもおす尾上の徒史宍　煉

待その二ツ月と初しゝか　蒙

行蛛うおくまれ撰もおとろひく　鼠

形巣分ゝ馬ゝぎゝ　三

花と咲宴と成杖よりろ笠　ゑ

ぬるゝ考ゝもゝくゝの赤　蒙

鼠煉の二師之市か菓龍を

きりもゝ作りて

彩ゝすき序や訪ゝ暮れ月　子治

きゝ蛛しくも羽ゝり啼啼　蝶嚴

蓑笠は思ひ捨てまうさうへく　嵐亭

まうさるる小童の初恵　扶白

初雪を机のうへの一椀　蒙翁

蓑笠ふかく小水もうまく　南楚

杉苔も注連のなるあり宵戸哉　三指

小村をれと炙も公家仕　子

ほくくと母は被をうち詠め　蝶

おとこらしらみけてゐる　嵐

乃見庵は乃世と月遠ふ冥北場　扶

庵風乃杉乃むらふ夕月　蒙

初冬合て菌の多柄を考る合　南

彩酒の酔ハ花目をのう　三

方角を見定るぬ河音　舟子

降るとふやと答まて号　蝶

陸奥衣乃情は　友雀　嵐

そけて生れ枝川の音　筆

通路

屋敷の路巾ふるへとほるふ　蝶羅
人乃釈乃間ありまふや蛍うり　嵐亭
遠ふて来く向ふのくらに蛍乱　紫雅
池乃に面乃目のるふ乃ふ　楮白
おそひ度と蛍ハまう野蛍小　南楚
このくき家へ近みちも蛍物　子洽
茅那ふまうとりるふ乃　三指

探路

みーう夜や徒小蛙の鶏の声　紫萩
敗やり史や形を久うふの蛍のり　楮白
水ふ〜へ祢さもとなるや杜若　南楚
竹乃子やふふ山陰へ女菖　嵐亭
うんこ多一里塚さへなる色乃う　蝶羅
眠蛍れ木奥の間をふ鶏小　三指

稀ふる二師ふうめて

彼岸を今行はるる相の地　南楚

井筒の清水古屋人を汲　嵐亭

菊よ皇れみそぎ膝をのろけて　蝶羅

卯月十五日晴天福島お五子洽拾句南楚

吉野山文字摺石を尋ねんと名所をすぐる

菊芳て屋の人用や志の姫山　嵐亭

はきしき拾ふ何とて思ふ　蝶羅

山口むらみる

石の背をたくる水鶏やうるれ摺　子洽

みしの夜城女草男菊や志の摺　嵐亭

思義をもとらひもうれ志の姫まり　蝶羅

さりひも菊よ御て志乃ふすり　仝

文字まりやるる三ツ口つうれるあ　仝

陰

逢摺

山陰や物ふ作まて　沈まり　仝

古將書

よろるるうげや二人の妻あやめ　仝

岩沼の沢辺の沢水体粹子を訪て

繁りをく松と花ゑり魚よ花　仝

息八郎とゆるゆ竜東門えて

目を笑ひ二木の松や春ゆく　嵐亭

一木ゆく雲の跡かは春二人連　蝶羅

笠為と語て

笠為やいく笠も卯月照　仝

美味をまゝくよそくるゝ　嵐亭

故中将の古墳を訪て

古塚や亡よ亡ふ苔の花　嵐亭

記念碑何を敷牧の声ゝ　蝶羅

卯月廿二日仙台に入て

何ものか魂消ぬゝ牡丹の府　仝

翌日為定庵の杜甲ゆいさ折れ

木の下葉所々遺跡を

営庭も木ゝ下園の古ひうれ　仝

もとゆらゝかぬ草ゝ露ぬれこうち敷　蝶嚴

みやこ出やさらぬ二筋の道もなし　仝

文博野や山形仲を友乃風　野月

うやこ出やうるも恋の鳴声ゝ　東扇

十荷菅

立荷ゝ病ゝ情れもゝ　や菅のもり　蝶嚴

敷笠城ゝそさゝ城ゝ　十荷ぬ菅　野月

民家をまもけハ流ゝ　十荷の菅　東明

壺碑

いしぶみや秋ハ水鏡のたゝく声　嵐亭

碑ゝ　橋ゝ　蝶嚴

山と成田とゝる文字ゝ苔ぬ也　東明

鶯笛やいしぶみ寄ぬ又位ゝ位　野月

末の松山

雲山ゝ波ゝ末ゝ老ぬ寄ゝ　蝶嚴

麦やとり上麦の穂波の聚うきうし　嵐亭
実赤乃松ぞおらすまきもの　跡月

沖の石

うの花よ花ちるよるの沖の石　嵐亭
麦畑のなかもぬれぬ沖の石　東明
被も沖の石ぬり汗ぬくひ　蝶叢

玉川

ゆふくまや捜さハ跡四よるの花菓　仝

ほとゝきす一こゑ聞のちとせとも　跡月

塩竈紀行

志ほがまや牧やうち千賀のうら伝ひ　嵐亭
志ほがまの海や牧やうち千賀　塩釜　奥行
舟路とすまきをかけて　蝶叢
志ほがまの尾比賀平とあらしてはて　東明
年ぶりの月ハ客ハ静なる　跡月
一回ゝ見数隙の表ちる銀の月　年
外掛いとゝ年乃煤　年

遠く海の桜や千賀のうらつたえ　蝶羅

薮塚氏金牛子の樓震樓に登りて

遠ふく海やゆく子賀のうすこうも　仝

松濤

春上る波まに島の青すゝれ　嵐亭

松一面やゝくひすも青を入るゝ　蝶羅

春高き名月をより絃ひ扇風の

樓上にたゝらく陽開の曲を訊ふ

待て居り一面玉の花もまれあるり　嵐亭

ふ更ふり名残れ一面の友ちとり　蝶羅

面土を松高き尺とり古たの風流と

いとも志りと陶泥のなとよすうて

巧や炎ゆて面るゝ名残を松の陰　野月

尺おくりて又薬陽の陶泥まちぬ　東明

五月待 東稿やむとむう　奥行

蜀山大作稿ゝ旅庵て

鴻く城一服や蜀の涼尺茶　蝶羅

訳きもて春を拂ふもまちゝ　嵐亭

石の巻とふ湊まて

舟板ふうるゝ町ありさんゝの巻　蝶蕉

る清水へ出るまて

細戸や一軒も近し此安し　仝

南部領戸名成とふ郡中を

馬市なりていと紙くしくれハ

馬市ふ市の牧まらや夏草　仝

此日終日南部馬数千疋牽つ来て

戸塚路くしきれハ

牽つれて城の山ふもと南部馬　蝶蕉

山の月とゝまる旅庵て社中ハ

訪ひ来る郡しく

山乃月や蔵しも深き一の風人　嵐亭

山の月や清さ乃ゆゑ桜実　蝶つ泡

あ云の〇萩刈の芳を高く作りて

細みちゝ隠院とうゝんおくの夏　星皓

墨山茂や戸旅れ去数　蝶蕉

桑枝雅士を高談して

梅先をとゝごもるやうほゝり　蝶巖

蝶巖雅伯と茅舎を訪ひ侍るに

ほゝ濡れむとす〳〵雨もやかゝるきて　桑林

おくの来つむ花の折うら　蝶巖

嵐亭の房に

橋の香や紅ふるゝ祇園の中　桑林

旅宿に侍りて小清水を聞くとき　嵐亭

平泉の藥庵にて

掘出してうされあやめ太刀鬼　蝶巖

る鎧

菖蒲の音はむかしてまつらし　嵐亭

只今唯山と河のこうんこ多　蝶巖

中尊寺光堂

面影やかゝる花うふむり堂　仝

ありうるや光堂はれ中ふひうも堂　嵐亭

達磨窟昆沙門安置

出雲国を遥て立り多門天　蝶嚴

見ふり仰の高くしやゝ高つ天　鳳亭

四位を見くまて

言鏡の代は左をあり仏のむ　爭之

たゝ力也菩薩と角すゝ　蝶嚴

鼻月形る仏の面天整る山を

金ホ之見て

高位とハいまて也れて時万なし　仝

阿弥陀の松

粽供へ有り　ハ乃雲も妹を　蝶嚴

古川とふ流れ供へ人の橋あり

杉ふり　さゝれて　我亭

さゝ流のふる川なきもゝ流れ

流れ　乃ゝ　ハこれてこさるゝ　仝

六月三日仙台へ帰京明亭返面

翌日東府亭亭仙

麻の葉は建立〳〵る幟うち　蝶巖
破れ残りてあやめふく形　東扇
豆煮くれかくまゐ車屋小　晃亭
元服もまだよい男なり　金馬
かんりと豆うとおそふ月の照　登也
題を〳〵て庚申唄　兎耳
ウ
簑の蓑あ月まくまりの吸ふくち　東鯉
うた世を野きて夏三一ッ蚊　知昂

く祈りる松の盛も幾むら　東明
小可り寄りも今ハ名を色　野月
宵北り陳の走り傳あり笑　橙日
を伝んとんお菜屋北久栄　夏雲
伯来を待い待宵の月と成　金馬
みのく新〳〵そよと秋風　晃亭
玉梨乃荷をむ〳〵ゆるる多　知昂
蓋ものてもあさむりの格　蝶巖

花雲吹ひらく風の氣ハ芳しく　　蛇耳
紙夜ふつゝいく霜ハとう所　　枕司
うく雲すもあおらる神の座　　東扇
出氣沢市とて立る山桂姫　　東理
る月奥小利休の日利おり沢く　　夏雲
苦乃ふりうら岩火とりの蓋　　簪也
いゝもうもうもうも考ふ月面　　跡月
敵ハ世事ハいろ見者　　東明

救ひ上り極り時欠る傳の縄　　蝶蕉
古いもうもうハ者も飛沼小屋　　風亭
かゝ志ハ徒を御ふ夜発蕎麦　　金馬
月を忘れ夢ても行られの月　　夏雲
牛蒡とぶに志ら彼のくつ連簾　　兎耳
破入ゝ家入るふろーき　　簪也
桜けハ訓芳神を極さまり　　枕司
き一百ふ考連時行　　跡月

きんくと石北色右乃みゝ十丁　知昂

唐も見るる氣う恠う位の笹　東扇

枝毎ふかさすも花のあきと　東鯉

蝶　可蓮をむけまい中　東明

去年ふるふる紅色の蝶の羽も

同じくれハ恠く嵐北嘆とあつて

粉からしよりも流や初月を　布朴

蝶罷牡丹代て翁の縁ちゝ三廣さ寸城

空おもふ風雅の彩や花あや夜　仝

そもめて蝶罷出せと謁して

色北色やうと色北このくまあみ月園　簑也

去りくく恠ふとそれろ題彩茶　東鯉

蝶乃羽とかうう狐し去去蝶　兎耳

嵐蝶の去風士八祖翁の記を考ふ北翁

象浮の藤うう去りの説話を松作て

細みうれ末つむ花やうのこゝ豆　知昂

糸扇子のそそと恠嵐亭蝶蝶の去嬰と恠てまうして

すゝ祢きあふ宿も扇乃風うかふ　仝馬

海更いとむいまく仙府よあやめれぬを
祝し給ふも知つらしくまろそさく

花をなり秀もあり蓬なやめ茅　蹄月

あやめふくはの秋さまうみちれく
高砂山の麓ある茶店よ杖をりて

彩美ひいりき百やと高砂やは　光亭

河骨や渡て及さうの高砂山　蝶花

とくら茅に渡て及中道　高砂山　枕日

水鶏も鳴て及おりて及ちひち庵　東扇

青田うう蛙も鳴て こむちや月　蹄月

夏うり雲岩山と登て町家の懸を添りて

足地ゆせて 沢市太郎の懸うれ　光亭

このくけを つきてひらめく懸ル　蝶花

雲宏うう風足おろしてのぼり氣　枕日

山うまりして里ホ青ける 懸うか　東扇

懸うも明青うゆ あこや庵　蹄月

場年八仙茶て

光ふく 称て十年のふひうれ　蝶花

巧や矢はく　ニ　れ奥ふり　十万象　嵐亭

十分れ月雫　月をうり彩あやめ　東明

・徳うり形恵　ふ　しにあやめ　知昂

・水及び風のうゝ巧り彩あや矢　蹄月

猪山乃　亜　癖も交る　称小　令馬

・さうふ湯や者る　れ空のなかしく　東扇

・新くの巧や矢や湯うれ乙　回心

五

亜又夜　探題

・新巧りと子馬の現く牧やり　蝶嶺

月うりも閑乃　乃ぶき　格再小　蹄月

さうを乙や野　桑の和ういちり焼　嵐亭

薄や去蒜て　水ハ　新れも　令馬

行者く習守　宗の乃うる　東扇

・矛竹や月雫　てふて伸市り　東明

姫百合れうう　ち新る山頂れ　嵐亭

水と絵の亜　ち　てろて　て早歯小　蹄月

千ようの長てり蓑や花あやめ　蝶蔵

尼寺のうしろ　む　樗　仝

摘殘る　畑の虹あり紅の花　東扇

きらきらふ袖もなくみひらき　東明

涼夢　変れうすひなきてや金鈔のむ　仝馬

松の実盗も燃りく月園　嵐亭

紫陽花や京きさらぎの通りあ　蝶蔵

初蟬やゆ行て居る沙所車　跡月

むらくゝ面白き青紅白面白孔　仝馬

青梅や児乃足踏の乗きうあ　東明

涼つゝやさすうゝ結乃ぜきゝ　東扇

又月六日加宝居奥行

小鼓もむらさ紅ふ紅のさ孔　嵐亭

友をちとうに魚る帳乃巣　跡月

校川乃京へ流れ山乃勢命　蝶蔵

笠島去夢の拾うまもさん　曙竹

藪入の暇をいとゝ惜み月
出ふしむ山の遠さふり
湖を前へ〳〵て菴の秋　四友
伊予もゝ〳〵手紙拝領　桃日
女房のさそゝの利発も友　夏雲
サ入させていなを振袖　麦車
木地挽乃孫娘もうさ世を家　暁竹
温泉の乳くさ八重乳侍を　蝶羽

八月を捜してまゝみちのわ　東明
ハ祖の磨の音もゝ〳〵　宗亭
吳足屋むう隠さぬ狀を訪　陶家
信濃さ鶏の裏米　兎耳
弛走ふる書もいろ〳〵花の座　桃日
陳ふるゆや表を三月　師月
麓ナラ屋根掃てゆをゝいゝ彩り　麦車
帆ふ〳〵行ふ〳〵ゆ船　夏雲

九山は赤かりし　うかいちは　顔　蝶羅
赤紅乃うるはしけやけき　嵐亭
大酒不那波衛尾も　みうきを　兎耳
寝毋ことにあらず　華日毛　水　桂日
海岸挽音に　さそはれやり　東明
白雨ふりて　戸ノ外　桂　口友
仲人乃さ墨ゝ　自傷ふたつ　緑水
汲んふ花香も　屑もうすし　陶家

白くと城をとりて月の雲　路月
御ふけて　尺八　寒　曙竹
出来秋を　因かう　烟なく　行違ひ　嵐亭
いさと　拵子は　守り　解りあり　緑水
佛もいろ　行くれ　長寿庵　兎耳
陰ひとつ　ふと　晴ひ　空　陶家
樓より　形くハ　一日　花は　幕　蝶羅
姻　逆うゆ　かへ　屋ふ　桂日

南部の手枕も手ゝ家ゝ志ばらく

二三枚乃紙帷子別れ哉　人　東明

南史の帰路も堅田と申ス伝説

今志りしくとゆてなれし月　陶家

餞別吟

又ちゝの松やとうるゝ風　徒司

見おろして少みゝむ麦の秋風　師月

ひちゝむくるの乗船や夏の花　四友

志ろくと時ゝ笠や木下闇　曙竹

見おろすも上戸彷なりぶりくし　兎耳

閑しなき和尚の旅法れ哉ふ　東明

夏陸あるのさ乃杖こそ色ゝり　東扇

引とゆる袖の金鈔や花いそう　夏雲

頼し和さ様さうの金鈔の花　麦車

乗ひちゝや志ゝ川とゆる墨ゝ人　緑水

留別

いうにせんりをて住の又月雪　蝶翁

立多の跡をかしてに清ふ加　嵐亭

東扇東明の二子に孝を情ふ

えらく落情をとまれ今ふ

世深へ杖をしとて

みしの夜や業華の多れのふる　蝶翁

名残

秋と又結ふかけて麦乃者　仙蓑　樓司

ようくこれハ秋思ふて為業ぞ　夏雲

みしの夜や月も遠入懸のうち　麦車

業鮎やちきりこれの面自　緑水

秋うあけて清れをき孫うれ　陶家

又節とたちとなぬう初孫　路月

雲つりより業子もかりて拝うふ　曙竹

掛花のさゝめ花ちり牡丹　四友
さゝなみや久ふも廣て春雪の松　東扇
曉乃さゝれ吉野さて　菱の形　東明
菱の華や十日の月乃曉てゝ　白糸
裾野ゝ不ゝろひ安き　内面ゝ　兎耳

咲使て花を拵ゝ　丈芝
光陰ゝ月ゝ　て紙子ハ　布朴

仰
仰向て月もち清の菊絮ハ　金馬
菊あ月ゝ　ゝ山内ゝ　地蓋　奥行
あゝ菊ゝ　ゝ月ゝ　山人目　素林
白雲不ゝ月ゝ山を菊菓ゝ形　白路

去乃ゝめて郎ゝめ雲や山さゝ　二ヶ松　一声
おもゝと梅ハ春信や夜ゝ　ゝ文　青苑
二ゝ忘の沼ゝ幸ハ雑子ハ　福治　蘭雅

稲妻や闇切さくる　東岳

夕月や外に寒庭へ這ふ物　吐虹　行

ゆらめき寄て陰ろふ春の雪　猪白

ちるぞ捨て多るの出て物ぐさ　南楚

梅の香や小家ひとつに入あまり　幸野　可貞

見まもる野ハ移さぬ山桜　岩沢　休梓

緑丹の路中より林〳〵　酒田　百和

名月やうしろ向る出もち　高ケ浜　北而

旧遠の表うつれて寒さうれ　文化

ほとゝぎす鳴も丹の夜うゝ　赤岸　鱗流

文原春久亟

桜ちる京のたゝりを巨燒小　大阪　麥宏

奥方へまりんよりる猫ゝ敢　米沢　柳舟

、

松しまの明るい象深の夕風

物うすく詠ぬくもあるよう

序にを賀しさく

己れ生れの庵ふくれ初るを　東武　松風子

二月十八日江を望て

雪きゆ合鶯れて面窓の出うの花　活丈

行春や走り出たる花乃ちらし山　梅渡

春うらやゆく入乃ちおりかと　野菊

岸寒ゑ春の松を荒うゝ　奥汝

庄かゝゝよ水ぬくゝや響一羽　黙我

春雨ぬ我ゝめハ傘の下うふ　風宿

又月雨や室の八潟れ下きゝ　蘭室

伊豆合ゝ水はみそらはの日　夜光

春柳や弟ふう木ゝ花ゝ何　文狐

走ゝ梅雨隠ゝ白ふ月秋ゝ　蓼也

江ゝ記又見法ふ清ゝ　夜梧

足定て露の眠ゝやいのゝ　大夢

陽炎や肩ふゝ乗る法ひ髪　雨青

名月や地ゝも風ゝ雨ゝの新　求光

みちのくにうまれし人の
あつとうて彼石の形をもりうる
きりあふてをりをるうしけあさ
今ていあるものの家にとのなりやせて
きしうしもりに考ふ文字もり　や雪